The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	動詞由来の副詞的成分の「副詞度」に関する計量的研究
Author(s)	林, 雅子
Citation	大阪大学, 2008, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49096
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【33】

氏　　名	林（はやし）　雅子（まさこ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２１６９６　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	**動詞由来の副詞的成分の「副詞度」に関する計量的研究**
論文審査委員	（主査） 准教授　石井　正彦 （副査） 教　授　土岐　　哲　　教　授　真田　信治

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、現代日本語の「動詞に由来する副詞的成分」の「副詞度」を、主として計量的方法を用いて調査・分析し、動詞と副詞との境界線上に位置づけられる副詞的成分の副詞らしさについて考察したものである。その構成は、３部７章からなる本文に、「序論」及び「結論」と、資料２編、引用文献等を付したもので、A4 判 160 ページ、400 字詰め原稿用紙換算約 480 枚より成る。

第１部では、動詞におけるテ形と連用形の使用上の差異について、先行研究の問題点を指摘した上で、新聞・論説文・文学作品の三つの文章タイプから大量の用例をとり、テ形に偏って出現する動詞と、連用形に偏って出現する動詞の、それぞれの特徴を明らかにするとともに、動詞句「～なる」の分析に基づいて、現代日本語におけるテ形と連用形の差異を、意味・機能的な差異と文章・文体的な差異との相関としてとらえる必要のあることを述べる。

第２部では、動詞のテ形・連用形に由来する副詞的成分について、その副詞らしさを形態・意味・統語の三つの特徴から数量化する「副詞度」を考案して、それぞれの副詞的成分の（動詞らしいものから副詞らしいものへの）連続相を見出すとともに、それと副詞の種類（陳述、時・頻度、意志態度、程度、接続、主体の心理、主体の様子、複数主体の様子）との間に一定の相関が見られることを明らかにする。また、テ形の副詞的成分が副詞度の大きいものから小さいものまで広く分布するのに対して、連用形が副詞度の大きいものに偏ること、「あわてて（逃げ帰る）」などテ形に特徴的な「状態修飾成分」は、副詞度も小さく、辞書や先行研究でも副詞と認定されにくいことを明らかにする。

第３部では、副詞的成分の副詞度と従来の副詞研究との関係を考察すべく、テ形の状態修飾成分に加えて、情態副詞・形容詞連用形・形容動詞連用形・「名詞＋デ」の状態修飾成分にも注目し、これらの文構造上の共通点を、先行研究を参照しつつ記述するとともに、これらのうち、特に様態を表わす副詞的成分に注目して、それぞれの用法と由来する品詞との関係を論じる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、現代の日本語で使用されている動詞由来の副詞的成分を対象に、その副詞らしさを数量化することによって、副詞的成分間の連続相を、とくにテ形と連用形との差異に注目しつつ、具体的に明らかにしたもので、副詞および動詞の研究としても、また、計量言語学的な研究としても、新しい局面を切り開く研究といえる。

まず、これら動詞由来の副詞的成分が、動詞らしいものから副詞らしいものまで連続的であり、その連続の様相を具体的に解明しようとする本論文の問題意識は、これらを動詞か副詞かに二分することを目指す研究が多い中で、妥当なものであり、とりあげた副詞的成分の範囲が広く設定されていることも適切である。

また、そうした連続相の具体的な解明の手段として考案された「副詞度」は、副詞的成分の形態・意味・統語の各特徴を総合した計量的尺度として一般性の高いものであり、その比較にｚ評点・レーダーチャートを用いるなどして、副詞らしさの連続相を視覚化することに成功している点は、高く評価できる。そのうえで、副詞的成分における「副詞度」と「副詞の種類」との間に一定の相関関係があることを見出した点は、本論文の最も重要な成果であるといえる。このほか、異なる品詞にまたがるとされる情態副詞的な語類を機能的な共通性に注目して「状態修飾成分」として一括し、その性質や役割の違いを体系的に把握しようとする試みも興味深い。

ただし、第１部で論じられたテ形・連用形の差異（選択）の問題が、第２部で明らかにされたそれぞれの副詞度の（分布の）違いとどうかかわるのかが必ずしも明確でなく、また、第３部でとりあげられた状態修飾成分の用法の検討に副詞度が利用されていないといったことも、論文全体の首尾一貫性を減じている。また、「連続相」という静的・共時的な把握が、動詞から副詞への転成という動的・歴史的なプロセスにどう関係づけられるのかも不明である。副詞的成分の選択に、語種や語構成の配慮がなされていない点も惜しい。

しかし、こうした問題点は今後に克服されるべき課題であり、本論文が、新たに考案した「副詞度」によって、動詞由来の副詞的成分はもとより、様々な品詞に由来する副詞的成分の計量的な研究の可能性を大きく拡げるものであることは間違いない。よって、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。